S. Ashina

オリエンテーション・　導入：近代キリスト教と政治思想
１．無教会キリスト教の諸問題
２．波多野宗教哲学の射程
Exkurs １：戦後７０年の教会と神学――組織神学の場合
Exkurs ２：ハイデッガーとキリスト教＋フィードバック

＜前回＞日本キリスト教思想研究の課題と可能性
１．宮田光雄『日本キリスト教思想研究』（宮田光雄思想史論集３）、創文社、2013年。
序章　日本のキリスト教
（１）日本キリスト教思想研究
２．二つの地平（キリスト教と日本）とその焦点としての近代
　日本　→　日本にとっての・日本の近代化におけるキリスト教の存在
　　近代日本を批判的に分析する視点としてのキリスト教
　キリスト教　→ キリスト教にとっての日本の意義、近代キリスト教を日本という視点から批判的に見る
３．思想史の諸コンテクスト　→　多様な研究の可能性
・近代日本：近代・東アジア、政治・経済・宗教文化史
・近代キリスト教：近代キリスト教思想史、宣教史
４．方法論
・「民衆」「天皇制」などの焦点をめぐって
・思想史、社会史、民衆史
・文献研究とフィールド調査
・諸コンテクストを柔軟に結合する
　　↓
・研究プロジェクト、共同研究
　　ネットワークあるいは制度
・基礎論としての哲学的思惟：「宗教と文化」、生といかなるリアリティか
（２）解放の問い・記憶とキリスト教
５．波多野の他者論：未思惟の思考、テクストの未来→「過去の未来」
「30. 波多野の近代批判の射程は近代日本に及ばないのであろうか。
　波多野の文化的生への批判は、表面的には、近代日本との接点をもつことなく展開しているかに見える、しかし、波多野のテクストを脱構築することによって、そこに、近代日本の没落の運命の指し示しを、未思惟の思考、テクストの未来として読み取ることは、一つの思想史研究として成り立つのではないだろうか。　→戦争批判としての『時と永遠』。」
６．宮田光雄「５　日本社会における福音宣教」「三　現代日本における《未克服の過去》」
「現代日本における《未克服の過去》＝戦争責任の問題」（174）
「現代日本における《未克服の過去》の問題の深層に迫るには、日本国民の戦争体験を基本的に天皇体験と関連した《聖戦体験》としてとらえる視点が必要になる」、「聖なる《国体》を中核とする国家の運命にたいする情熱的な参加」（179）
６．「過去」は無に帰したわけでも消滅したわけでもない。抑圧され忘却されたかに見えて、過去は現在の中に生き、未来へと語りかけている。
　また、過去において存在した解放の問いを現在において活性化することも可能である。
　　聖書を読むことにおける、キリストとの「同時性」！
　この「過去の未来」を顕わにすることも思想史研究の課題となる。
　　↓
７．基礎論としての哲学的思惟：
・モルトマンの時間論：

Jürgen Moltmann, *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre*, Chr.Kaiser, 1985.
単線的な時間図式（過去→現在→未来）を超えて
進歩としての歴史
↓
アウグスティヌスの時間論：→意識の内的時間
記憶と期待を志向する現在
↓
波多野の時間論：他者としての将来が存在を贈与する。しかし、過去は？
↓
モルトマンの時間論：「過去／現在／未来」の複合的で多重的な循環関係

Exkurs ２

ハイデッガーとキリスト教

０．キリスト教思想にとって、哲学はいかなる意味を有しているのか。
キリスト教思想にとって、ハイデッガーは何者か。
１．ハイデッガーとキリスト教との関係をめぐる問題の整理（『続・ハイデガー読本』法政大学出版局、「コラム」）
↓
（１）問題・概観
（２）諸動向について
（３）まとめ・評価

（１）問題・概観

３．Judith Wolfe, *Heidegger and Theology*, T & T Clark, 2014.
Note on the text
Abbreviation

Introduction
1 Heidegger's Catholicism（1889-1915）
2 Heidegger's Protestantism（1916-1921）
3 The emancipation of philosophy（1921-1929）
4 Theology in Being and Time
5 Heidegger between Hitler and Hoelderlin（1930-1935）
6 The later Heidegger（1935 and beyond）
7 Heidegger among theologians
8 Heidegger in theology

Bibliography
Index

４．研究対象と研究との錯綜した関係について。
「ハイデッガーとキリスト教」を論じる際の検討対象として、まず挙げられるのは、ハイデッガーと同世代のキリスト教思想家のハイデッガー論である。しかし、ここですでに一つの文献についての二重の取り扱いが必要になる。たとえば、ティリッヒの『社会主義的決断』（1933 年）は、「ハイデッガーとキリスト教」を論じる題材にもなるし、あるいはこのテーマについての一つの先駆的な研究としても位置づけうる。
５．こうして、研究史をまとめるのは、思いの外、難しい作業になる。
また、取り上げる文献を、単行本に限定するのか、雑誌論文をも加えるのか、さらには、

博士学位論文はどの程度視野に入れるのか、そして、辞書の項目などの中における「ハイデッガーとキリスト教」への言及や、学術書以外における論評・エッセイは無視するのか、こうした点、つまり検討範囲も問題になる。

実際、本や論文のタイトルだけからは、想定できない仕方で、「ハイデッガーとキリスト教」についての重要な議論が含まれる場合があり、研究史を分析整理する作業は切りが無いものとなる。たとえば、次のものは、きわめて重要であるにもかかわらず、「ハイデッガーとキリスト教」というキーワードによる表面的な調査（検索）においては見落とされる可能性があるものである。

６．辻村公一「ブルトマンとハイデッガー―信仰と思惟―」(『ハイデッガー論攷』創文社、1971 年、の附録一)。

一　序言。問題の説明
二　出會の時
三　出會の前
　（A）ブルトマンとヒストーリェの問題
　（B）ハイデッガーとメタフュージックの問題
四　ブルトマンとハイデッガーとの相違と相應
　（A）世とひと
　（B）神の啓示と無の開示
　（C）終末論的今と瞬間
五　結語。信仰と思惟

７．しかし、どうして「ハイデッガーとキリスト教」なのか。キリスト教にとっていかなる意味があるのか、哲学にとっていかなる意味があるのか。

（２）諸動向について

８．隣接分野（宗教哲学・現代思想）との差異化と整理方針

・隣接分野におけるハイデッガー論との差異化による、キリスト教思想の独自性の解明。
　フランス、イタリア、最近のアメリカ（カプート）はキリスト教というよりも宗教哲学
・動向の整理の視点：世代／地域／教派

９．同時代（1920 年代～ 1960 年代)、次の時代（1950 年代～ 1980 年代)、
　さらに次の時代（1990 年代以降）

・時代区分としては、

ハイデッガーと同時代（1920 年代～ 1960 年代）：バルト、ブルトマン、ティリッヒ、またボンヘッファーもそれに加えることができるかもしれない。

ハイデッガーの次の時代（1960 年代～ 1980 年代）：エーベリンクやフックス、またユンゲルなどのポスト・ブルトマン学派、すでに本ブログで取り上げたマッコーリーあるいはギルキー、トレーシー、そしてラーナー、ブーリ、パネンベルクやモルトマン。

そしてさらに次の時代（1990 年代以降)。

この最初のハイデッガーと同時代に属する思想家は、このテーマの題材となりうる位置を占めており、最も最近の時代に属する人々は、むしろこのテーマについて専門研究を行っている人々ということになる。中間の世代は、その点、位置づけが難しい。

10．ドイツ

Otto Pöggeler, *Philosophie und Herneneutische Theologie. Heidegger, Butlmann und die Folgen*, Wilhelm Fink, 2009.

1) 同時代：<u>バルト</u>、<u>ブルトマン</u>、<u>ティリッヒ</u>、<u>ボンヘッファー</u> 、
　『存在と時間』(1927) に至るハイデッガーが焦点。

2)ブルトマン学派、フックス、エーベリンク、ユンゲル
　　中期以降のハイデッガー
3)ブーリ、オット（『思考と存在――マルティン・ハイデガーの道と神学の道』白水社、1975年）、パネンベルク
11．同時代のドイツ神学
・バルト：KDIII/3(S.395)　→　拒否
・ブルトマン：1920 年代の思惟（*Glauben und Verstehen I*, J.C.B.Mohr, 1933）で、
　Existenz 概念を使用。Welchen Sinn hat es, von Gott zu reden ?（1925）
・ティリッヒ：*Die sozialistische Entscheidung*, 1933 (MW.3)
　Einleitung: Die beiden Wurzeln des politisches Bewußtsein
　1. Menschliches Sein und politischen Bewußtsein
　Die Wurzeln des politischen Denkens müssen im menschlichen Sein selbst aufgesucht werden.
　ein Bild des Menschen, eine Lehre vom Menschen
　Der Mensch ist im Unterschied von der Natur ein in sich gedoppeltes Wesen.
　die menschliche Frage nach dem "Woher", Geworfensein, der Ursprung
　Das ursprungsmythische Bewußtsein ist die Wurzeln alles konservatischen und romantischen Denkens in der Politik.
　die Frage nach dem "Wozu", die Forderung
　Die Brechung des Ursprungsmythos durch die unbedingte Forderung ist der Wurzel des liberalen, demokratischen und sozialistischen Denkens in der Politik.
　Die Forderung, die von dem zweideutigen Ursprung losreißt, ist die Forderung der Gerechtigkeit..... Gerechtigkeit ist die wahre Macht des Seins. ... Der Ursprungsmythos darf nur gebrochen, enthüllt in seiner Zweidrutigkeit, in das politische Denken eingehen.
基礎的人間学：社会的構想力　→ 政治思想の二つの系譜
「世界―内―存在」（「自己―世界」、「運命―自由」）「被投性―企投」
「起源―要請」、起源神話とその突破（預言者、ヒューマニズム）→　起源の両義性
　実体原理（形成原理）と修正原理（批判原理）
↓
政治的ロマン主義（保守的あるいは革命的）とその意義
自由主義・社会主義とその限界
↓
宗教的社会主義の課題：社会主義と起源の力の再統合、合理性と非合理性

・ボンヘッファー：現代キリスト教神学の文脈におけるハイデッガー
　Akt und Sein. Transzendentalphilosophie und Ontologie in der systematischen Theologie, 1931.
12．英語圏、日本、そのほか
・地域的言語的には、ドイツ語圏と英語圏が中心になることは言うまでもない。哲学者に注目すれば、フランスやイタリアも重要であり、また日本における議論の状況も独立して扱うことが必要であろう。
13．英語圏：ギルキー、マッコーリー、トレーシー
Langdon Gilkey, *Reaping the Whirlwind. A Christian Interpretation of History*, The Seabury Press, 1976.
David Tracy, *The Analogical Imagination. Christian Theology and the Culture of Pluralism*, Crossroad, 1986.

・マッコーリー
ジョン・マクウォーリー『ハイデガーとキリスト教』勁草書房、2013 年。

はじめに
第一章　経歴と初期の著作
第二章　日常的な非本来的実存
第三章　覚悟した本来的実存
第四章　形而上学と神学
第五章　物と技術と芸術
第六章　思惟と言語と詩
第七章　ただ神のごときものが我々を救うことができる
第八章　残された問題
　第一節　ハイデガーを翻訳すること
　第二節　ハイデガーと国家社会主義
　第三節　ハイデガーと神秘主義

役者付論　『存在と時間』と実存主義的神学――ハイデガーとブルトマン
訳者後書き
文献法
　Ⅰ．ハイデガー著作一覧
　Ⅱ．ハイデガー関係文献一覧
　Ⅲ．ハイデガー著作翻訳一覧（訳者作成）
注
　Ⅰ．原著者注
　Ⅱ．訳者注
　Ⅲ．訳者付論注
索引

John Macquarrie,
God-Talk. An Examination of the Language and Logic of Theology,
The Seabury Press, 1967.
・John Macquarrie, *An Existentialist Theology. A Comparison of Heidegger and Bultmann*,
Penguin Books, 1955.
・*Existentialism*, Penguin Books, 1972.
　実存主義の哲学者ハイデッガーの神学的意義
　　cf. ティリッヒの「実存哲学」(Existential Philosophy, 1944. in: MW1.)
14．日本語圏：野呂芳男、小田垣雅也、花岡永子、沖野政弘、茂牧人・・・
1)小田垣雅也
・『解釈学的神学』創文社、1975 年。
　たとえば、「第四章　解釈学と神学」では、言葉・解釈という視点で、前期から後期のハイデッガーが論じられる。その上で、「第五章　解釈学的キリスト論」における「言葉の出来事」「イエスの譬え」との関わりにおけるブルトマン学派の議論の分析や、「第六章　解釈学的神学と神」での現代神学の諸動向の分析は展開されている。
　ブルトマン学派におけるハイデッガー受容が小田垣の視点から、明確に分析されている。

・『哲学的神学』創文社、1983 年。
　ハイデッガーについてのまとまった大きな議論がなされているわけではないが、「第２章　現象学、解釈学、神学」や「第３章　「関係」「間」「一」」においては、ハイデッガーの

議論が神学の方法論を論じる中で、いわば不可欠の役割において登場する。自らの方法論の構築展開におけるハイデッガー論といった感じであろうか。

・『現代思想の中の神――現代における聖霊論』新地書房、1988 年。
　ハイデッガーについての議論は､次の現代思想の文脈との関わりにおいてなされている。「第四章　「言葉への転回」と現代神学」､「第五章　ロゴスの終焉」。

2) 花岡永子
・『絶対無の哲学――西田哲学研究入門』世界思想社、2002 年。
　この文献は、タイトルからもわかるように、西田哲学、絶対無の哲学がテーマであるが、そこにハイデッガー論が組み入れられている。たとえば､「第 II 部　絶対無の表現の問題」の「第２章　哲学における「同一性」と「自己同一性」の問題」では、副題が「ハイデッガーと西田幾多郎の哲学を介して」であり､「第１節」が「ハイデッガーにおける「同一性」の問題」となっている。また、続く「第３章　神の概念の問題」でも､「第１節」の「５－⑤　仏教者にしてハイデッガー研究者である哲学者・辻村公一の場合」となっており､「第 III 部　絶対無に働く霊性」の「第３章　「過程」と「場の開け」の問題」と「第４章　有機体の哲学における時と永遠の問題」では、ホワイトヘッドとともにハイデッガーが集中的に扱われる。

・『「自己と世界」の問題――絶対無の視点から』現代図書、2005 年。
　ここでもハイデッガーは中心的な思想家として位置づけられる。特に、まとまった議論としては､「第二章　「身心一如」と「根源的いのち」」の「二　自然と技術の問題――絶対無の視点から」における「ハイデッガーの技術論」が挙げられる。

3) 沖野政弘『現代神学の動向――後期ハイデガーからモルトマンへ』創文社、1999年。

15. プロテスタントとカトリック
　出発点としてのカトリック、関わり合いにおける現代キリスト教思想としてのプロテスタント。
　ラーナー
16. キリスト教思想はハイデッガーの何に注目してきたのか。
1) 哲学的人間学としてのハイデッガー（『存在と時間』）
・バルト、ブルトマン、ティリッヒ、ボンヘッファー
　　世界内存在＝時間性、本来性と非本来性
・近代キリスト教思想におけるハイデッガー：ティリッヒ、ボンヘッファー
　　神学のパートナーとしての哲学
　　↓
・マッコーリーもこのライン（実存論的神学）
2) 言葉の出来事、イエスの譬え：
　ブルトマン学派（エーベリンク、フックス、ユンゲル）、オット
・Eberhard Jüngel, *Paulus und Jesus. eine Untersuchung zur Präzisierung der Frage nach dem Ursprung der Christologie*, J.C.B. Mohr, 1962.
・小田垣雅也
・クロッサン：*In Parables. The Challenge of the Historical Jesus*, 1973.
3) 存在理解、真理理解
　　存在の歴史性、存在と存在するものの存在論的差異の理解
　　真理の歴史性（ティリッヒの「真理の動的理解」）
　　ティリッヒ（カイロスにおけるロゴス。Kairos und Logos, 1926）

↓
類似しているのは偶然ではない。時代と伝統の共有。

（３）まとめ・評価

17. キリスト教との関連性
キリスト教神学の側でハイデッガー哲学に関心をもつのは、次の二つの場合。
ハイデッガー哲学が、人間学として、あるいは言語理解において、キリスト教思想にとっても有益である。
ハイデッガー哲学は、表面的には無神論的と見えても、実はキリスト教あるいは聖書の思想と緊密な関連がある。否定神学あるいは神秘主義の系譜でハイデッガーを理解する。

18. ハイデッガーと聖書的思惟の隠された関係
・マルレーヌ・ザラデル『ハイデガーとヘブライの遺産――思考されざる債務』法政大学出版局、1995 年。
・茂牧人『ハイデガーと神学』知泉書館、2011 年。

序文

第一部　ハイデガーと神学
　第一章　初期フライブルク時代の神学的考察
　第二章　哲学と神学――マールブルク時代のブルトマンとの対話
　第三章　神の思索
　第四章　言語論と痛みとしての否定神学
　第五章　ヘルダーリン論と神を超える自然
　第六章　シェリング論と無底の神学
　第七章　真理論と否定神学
　第八章　存在と神を結ぶもの―― Abgrund の思索

第二部　ハイデガーの思索から宗教哲学へ
　第九章　傷による赦しの宗教哲学
　第一〇章　キリスト教哲学の可能性

あとがき
参考文献
索引
欧文要旨

・「ハイデッガーとキリスト教」とをテーマ化する上で問題となるのは、両者が表面的な断絶にもかかわらず根本的なレベルで緊密に結び付いているという研究者の予想である。キリスト教研究者が「ハイデッガーとキリスト教」を論じる際に、しばしば前提とされているのは、この予想であり、それを展開するために設定される設問が、神（々）、存在、言葉、存在史、人間理解、そして否定神学、神秘主義などなのである。
しばしばこうした問いの立て方は循環論法に陥ることになる。

19. しかし、いずれにせよ、ハイデッガーと同時代以降のキリスト教神学との間に、単純な影響関係などを想定するだけでは、奥行きのないつまらない議論になる恐れが多分にあるものと思われる。むしろ、ハイデッガーと現代キリスト教思想とは同じ伝統（この伝統に、神秘主義、否定神学、言語論、人間理解などが属している）と歴史時代を共有していることから、両者の関係を考えるべきである。

20. Paul Tillich, "Heidegger and Jaspers,"(1954) (Alan M. Olson (ed.), *Heidegger & Jaspers*, Temple University Press, 1994, pp.16-28.)

And this leads me to my final point: When you deal with existentialists, don't go to them in order to find answers. The answers one finds in the later Heigdegger, for example, do not come from existentialism but from the medieval Catholic mystical tradition within which he lived as a seminarian. The answers one find in Jaspers come not from existentialism but from the classical humanist tradition or, more precisely, German Idealism; and the answers one finds in Gabriel Marcel come not from existentialism, but from classical Catholic orthodoxy. So also the answers one might find in Kierkegaard come from Pietistic Lutheranism, and in Nietzsche, from the philosophy of life with all of its romatic ambiguities and divine-demonic dimensions. Or if you take the early Marx and call him an existentialist, as I would do, then it is the classical tradition of the revolutionary sect going back to biblical propheticism which motivates him. (27)